

## 私たちの「風の松原」物語 ……その三……

——袴田与一さんのお話——

浅野 ミヤ

（能代市）

その一、その二に昭和の初期のころの様子をまとめ、次は戦中、戦後へとつなげていきたいと思っていたのですが、戦時中の松林の様子（山火事や砂丘の破壊で大変な被害を受けたことなど）を知るには、もっと人を捜さないと分からないことが多く、これからの聞き取りを待つこととし、今回は戦後間もなく能代営林署に入り、海岸砂防の復旧作業にかかわった袴田与一さん（昭和四年生まれ・能代市長崎）のお話です。

◇

私は昭和二十三年営林署に入り、すぐ能代浜の砂防事業に配属になりました。

当時、海岸線の砂丘（戦前に造られた前砂丘、下浜から長崎まで約三・八キロメートル）のあちこちが破壊され、砂が入り込んで相当な面積の松が枯れていました。三〇四メートルに育った十年生ぐらいのものでした。戦争中はすべてが戦争にむけられ、予算もつかず、人手不足もあって手入れできなかつたのでしよう。自然の破壊力は恐ろしいものだと思います。

戦争中といえば、昭和十八、九年ごろ、青年学校で能代浜へ植林の勤労奉仕に行ったことがあります。営林署員の指導で小さい苗（一年生ぐらいだったでしょうか）を「ひとくわ植え」といって埋めわらも使わないで植える簡単なやり方でした。海岸線からかなり街側の区域だったから、あんな植え方でも根付いたのでしょうか。着物にゲタやぞうり姿の母さん方も大勢いました。

復旧工事は私が入署した昭和二十三年ごろから始まりました。当時はまだ機械力はなく、すべての資材は人の背に担がれて運ばれました。着る物も今のようになく、真冬にすだれを付ける作業にゴム手袋もなく素手でした。手は動かしている間は冷たさを感じないものです。体も寒いには寒いのですが、これが普通だと思っていました。寒い時は動いていないと耐えられないからひたすら体を動かして働くのです。

再生ゴムの長靴は弱くてすぐ割れてしまい、上から入った砂が下から抜けるから、破れているとかえって都合がいいよいうなものでした。長靴に砂がびっしり入って抜かれないこと

もよくありました。

春・秋の飛砂は吹雪のようで、目を開けていられないくらいで、そんな日に現場に向かう時は前の人にくっついて行かないと分からなくなります。よく間違えたものです。

夏はステテコ一枚でかけや打ち（砂丘を造るためのくい打ち）作業、地下足袋も熱くなって、海岸に打ち寄せられたゲタを履いたりする人もいました。

雨の日は合羽もなく“けら”を着ました。どんな天候であっても適期適作業、仕事は年中あったのです。

当時の人は今の人はとてもまねできないくらい働いていました。あれほど汗を流し、苦勞しても、やめたいという人もいなかったし、つらいとか大変だとかあまり感じなかったのは、骨折る以上に楽しさがあったからだと思います。作業員は男女とも二十代が中心で、同じ年代の仲間がいるせいもか皆楽しそうでした。砂原でごはんを食べ、昼寝もせずに、押っつけたの引っぱったのと遊んでいました。自然の中での仕事だったこともあるかも知れません。

今でも当時の仲間と出会うと必ず「あのころおもしろかったですなー」「昔の仲間と一杯やりてな」という話になります。

「後谷地会」という浜で働いた人たちの会があって、二十一年ぐらい前一度集まったのですが、昭和の初めごろから浜で働いた人となると大変な数で、その時も二百人以上に連絡したように思います。

若い時代の精いっぱい頑張ったという満足感でしょうか、皆忘れられない思い出になっているのです。私も苦勞したこにより楽しみながら仕事した思い出が多いのです。

昭和二十五、六年ごろの松くい虫発生時は弱った大きい松（老木）がやられました。まだ薬剤防除もない時代ですから、虫が入っている間に皮をはいで焼却処分しました。

エサ木（虫を集める）の調査をしたり、風倒木の処理、盗伐監視、いろんな仕事がありました。冬はスキーで林の中を巡回し、盗伐者を追ったこともあります。

能代浜の植林は昭和三十五年ごろまで補植を含め続きました。私の海岸の勤務は昭和三十八年までの十五年間で、その後、種苗事業所に転勤、六十三年退職しました。

今も年に数回は松林に行つて自分たちの植えた所を回りります。「このケド（道路）物背負つて、ここで休んだ」とか思いながら……。同じに植えても大きく育っているのと小さいのと差があります。「オレと同じで大しておがれね（成長できない）松もあるな。それでも年いったたいな“ちっちゃえても（小さくても）おっきい木に負けねで、頑張つておがれや”」つてついつい声をかけている時があります。

海岸の松は成長は遅いですが固く引きまっています。根元の方を輪切りにしてみると年輪の中心が風の来る方に寄っています。それだけ風の影響を受けているわけです。

今は我々が頑張つて植えた松があんなに成長したおかげで

大きい松（明治以前からの）も守られ、能代の街も守られてきた。グラウンドのまわりの老齢木だって限界あるだろうし、その後は我々の植えた松が代わりを果たすだろう。いい職場であった。末代まで残るいい仕事、大事な仕事をしたんだなあと思っっています。

いつだか「グラウンドの後ろ、全部切って住宅地に開けたら…」という人がいるので、思わず「ぼがしゃべりすな！あの木あなるまで何百年経ったと思っ…。何のためあの林あらったが考えてみれ！」と怒鳴ってしまい「おお、おっかね。営林署だものな」（笑）と言われてしまったことがあります。

山に植えた木は伐期が来ると、柱になったり家になったりで役に立つが、砂防林は人間が故意に切らない限り、自然に枯れるまで残ります。砂防林はどこまでも“砂防のための林”であってこそ生かされるのであって、その目的から少しでもはずれることがあってはならないと思っっています。

飛砂の害を知らない今の人たちは砂防林の果たす役割を忘れがちです。今は苦しみが分からないから大切さが薄らぎ関心がないのです。もっと海岸に住む者の自覚が必要です。

◇

「頑張っておがれや」と声をかけられたら、松だってどんなにうれいことでしょう。そういう声をかけられる人って木も人も同じ生き物であることを体で感じられる人なのでしょう。

う。砂防林の松もそういう人たちに励まされて根付き、大きくなったのかもしれない。実に味わいのある、心に染み込む一言でした。



絵・三戸みつ